

ヨシでびわ湖を守る ネットワーク通信

04

VOL.



新緑の季節となり、ヨシ原では1mほどに育ったヨシが心地よい風に優しく揺れていました。さて、6月号も様々な話題をみなさまに紹介させていただきます。

2010.5 西の湖のヨシ原

ヨシ原ってどんなところに出来るの？
「今さらそんな事」と言われるかも知れませんが

でも意外と水辺ならどこでも生え
思われる方が多いのではないですか

ヨシの
まめ
ちしき

自然条件として、①砂質であること
②遠浅であること ③波風が弱い所であること ④水深が1m
までであることなどの条件がそろって地域にヨシ帯が出来るの
です。ですから、遠浅でも底が岩や石の場合はヨシ群落は出
来ないのです。

それなら、「なぜ彦根地域にヨシ帯がないのだろうか、遠浅で
砂地が広がっているのに」前から疑問に思っていたことな
のですが… ある文献に「冬から春にかけて季節風が強く、
この影響が大きいと考えられる」と書かれていました。

これで少し納得！
みなさんはいかがでしょう。

びわ湖を知る ■ 問題



<問題> びわ湖がラムサール条約湿地に登録されたのは何年でしょうか。

- ①1983年 ②1990年
③1993年 ④2000年

特集 1ページ

イヌワシの棲むびわ湖の森

【イヌワシとの出会い】

滋賀県の約半分の面積を占める森林「びわ湖の森」は京阪神1400万人の水瓶であるびわ湖を支えています。その森林生態系の食物連鎖の頂点に位置しているのが猛禽類のイヌワシです。イヌワシは東北地方や中部山岳地帯の山間部に主に生息していますが、滋賀県のように経済活動が盛んで人が多く住む地域の森で生息が確認できたことは驚くべきことなのです。

滋賀県ではかつてイヌワシの生息記録はなく、その存在は知られていませんでした。しかし、地元の古老の方から話を聞く中で「三星鷹」や「黒い鷹」という名で呼ばれる猛禽の存在は知られていることが分かりました。

例えば、「三星鷹」と呼ばれていた猛禽は“両翼と尾翼に白斑がある”大きな鷹で、6月頃にやってくると言われていました。この白斑はイヌワシの幼鳥の特徴で、6月というのは幼鳥が巣立つ時期と重なります。また「黒い鷹」は白斑のない親鳥のことを指し、一年中見られていたのです。

また、地元には「天狗」伝説があります。昔の人にとって天狗とは、人間にない超能力を持った生き物で、超自然現象を起こす存在でした。自分たちに解明出来ない事はすべて天狗さんの仕業にすることによって、不気味な自然現象を納得していたのです。

イヌワシの飛ぶ姿は、超自然現象そのものです。まるで重力が無いかのように空中に静止しているかと思うと、時速200~300kmの速さで一気に降下し、あっという間に見えなくなります。

こんなイヌワシの飛ぶ姿が天狗の姿に重なってきたのです。日本各地に数多く存在する天狗伝説の中で、イヌワシの生息と関係がある地域がいくつか存在しています。

このように、昔の人はイヌワシという名前を知らなかっただけで、実際には山の生活の中でイヌワシとは身近な付き合いをしていたことが分かります。



アジア猛禽類ネットワーク会長
山崎 亨 様より

※※※

山崎さんは、幼少の頃より父親の影響で自然に親しむことが多く、中学の頃に図鑑で見たイヌワシに魅せられ、氷ノ山(兵庫と鳥取にまたがる)に生息するイヌワシの映像を見たのをきっかけに鳥取大学に進まれました。休日には中国山脈にイヌワシの観察に頻繁に出かけられ、もしかすると滋賀県にも生息しているのではないかとの思いが湧き、1976年3月、旧永源寺町の君ヶ畑地区より鈴鹿山脈に入り、三重県境あたりで初めてイヌワシと遭遇されました。

これが滋賀県で初めてのイヌワシの生息確認となったのです。



「三星鷹」と呼ばれていたイヌワシの幼鳥 : 撮影:片山 磯雄 氏



滋賀県で初めての繁殖確認となったイヌワシの親子(1978. 5. 20) : 撮影:山崎 亨 氏

特集

2ページ

【山の変化とイヌワシの減少】

1980年代では、鈴鹿山脈には6ペアのイヌワシの生息が確認されていました。しかし、1995年になると4ペアに減少し、今もその状態が続いています。さらに、とにかく幼鳥が巣立たない。産卵しなかったり、産卵してもふ化しないという状態が続いています。現在は、滋賀県全体で年に1羽育つかどうかというとても厳しい状態にあります。その理由は山が変わってしまったからです。この50、60年の間に、人が山に入らなくなり手入れがされなくなりました。また、かつての落葉広葉樹の森は、戦後の拡大造林政策で針葉樹ばかりの山に変わるとともに、伐採期を迎えた木材が価格の下落の影響で伐採されなくなったことが大きな原因です。

イヌワシは空から獲物を探し、急降下して捕らえます。冬に葉の落ちる広葉樹の森では、冬季には獲物を空から見つけることができますが、針葉樹の森では1年中、獲物を探すことが出来ません。また、手入れがされずに下草も生えなくなってしまった杉林では中小動物が少なくなり、イヌワシの獲物も生産できなくなってしまったのです。

植林面積だけを優先し、森林の多様性を無視した偏った拡大造林政策がイヌワシの減少を招いた大きな原因となっているのです。

【イヌワシの森を守る】

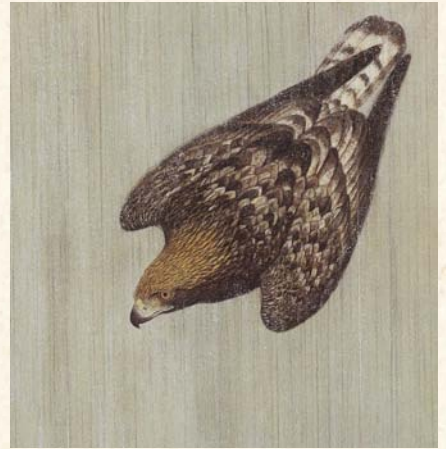
イヌワシを守るという事は決して森に手をつけずに放って置くことではないのです。以前、イヌワシは原生林に生息する生き物として自然保護運動の旗頭にされました。しかし、それは間違いです。

山の森林に手をつけないことだけではイヌワシの保護に繋がりません。大切なのは、まずイヌワシの棲む環境が昔とどのように変わったかを知ることです。それによって、イヌワシが必要とする森の環境が分かり、イヌワシも棲める山の活用方法が見つかります。人間が勝手に憶測するのではなく、イヌワシの目線から見た保護方法や山の活用方法の提言が必要なのです。例えば、イヌワシがよく狩りを行う尾根部には針葉樹を植えない。人工林は手入れを行い、成熟した人工林は更新を行う。そのためにも、木材の活用之道を開くことがとても重要になってきます。その活路として、昔のように燃料(マキ・炭)に依存することは不可能でしょう。それに代わる建築材、製紙、木質ペレット等に利用する方法をみんなで考えていく。社会全体で人とイヌワシが共生できる森林を作り上げて行くことが大切です。

昔、人は生活の糧を得るために感謝と畏敬の念をもって山に入り、持続的に生活できる方法を知恵や文化として伝承してきました。決して無茶な利用はせず、山も栄えながら自分たちの生活も維持してきたのです。

「イヌワシが棲める森」を目標にし、長期的なビジョンを持って、イヌワシと共生できる森作りをみんなで考える。食物連鎖の頂点に位置するイヌワシを守ることが、その傘下にいる生き物を守り、バランスのとれた生物多様性の森が再生されることに繋がるのです。

そして、その健全な森作りがびわ湖を守ることに繋がるのです。



絵：描画：兵藤 崇之氏



絵：描画：兵藤 崇之氏

※※※

現在山崎さんは、アジア猛禽類ネットワークの会長として、東南アジアを中心に猛禽類の保護活動を通して、豊かな自然を守る活動を進められています。

目指す所は、「その国の人たちが自分たちの歴史や自然を研究し、自分たちの力で自然を守っていく人材を作る」との信念のもと活躍の場を広げておられます。

みんなの リエデン

ボランティア体験 ～ 営業グループ

～ヨシ刈りを通じて感じたこと～

リエデンシリーズをリリースしてまもなく3年あまりになります。これまでに地元のフェアやイベントなどで、様々な方へヨシの効用や活用することでの環境効果などの説明をしてきました。その中で、多くの方が生まれも育ちも滋賀県なのにヨシのことをよく知らず、何となく生えている雑草ぐらいにしか思っていないと聞くことが多くありました。

関心がなければ、ヨシのことをなかなか分かって頂けないことを感じていたのですが、そういう自分もリエデンの事業を始めるまでは、びわ湖の環境についてじっくりと考えたこともなく、ヨシについても全くといっていいほど知識はありませんでした。そうした中、当社の取り組みであるリエデンプロジェクト(ヨシの活用及び環境意識の拡がりを目指す)の中で、まず環境行動を実践してみる『ヨシ刈りボランティア』へ参加する機会があったのです。

ヨシはご存じのように『刈る・作る・使う』のサイクルによって循環し、活用が進むことでびわ湖の環境をよくしてくれます。その最初の刈る段階での行動がヨシ刈りボランティアです。

はじめて参加する際は、個人的にはボランティア＝無料奉仕というイメージがあり、“何で休みの日にわざわざ長靴履いて草刈りに行かないか”という思いと仕事の一環だから仕方がないという諦めで参加しました。

しかし、いざ参加し始めると日頃から体を動かす運動も特にしていなかったためか、妙に充実感と開放感がありました。また、周りを見渡すと、老若男女を問わず多くの方が参加されており、びわ湖の環境保全に少しでも携わろうと思う人が少なくないことを実感しました。次第に、共通の目的に仲間意識が芽生え、終わったときは個人的にも達成感を感じるようになりました。

※ヨシ刈りは真冬にあり、これが真夏の炎天下の中でということでしたらひょっとして状況や気持ちは変わっていたかもしれません・・・。

以後、社内でのヨシ活用を盛り上げるキャンペーンなどの後押しもあり、毎年恒例(年2・3回程度)となっているヨシ刈りに、ほぼ毎回参加し続けており、むしろ楽しく感じるようになってきたのです。

いまではヨシ活用を進める仕事に携わる者として、貴重な経験をしていると感じています。

このボランティア経験で自分自身の意識の変化は何かのきっかけで、楽しくもなり、辛くもなることを改めて感じました。これからはヨシ刈りボランティアに限らず、普段生活している中の身近なところで、まず環境行動を起こしてみる。すると、そこから新たな環境意識が芽生えるかも知れません。そんな気持ちを持ちリエデンの営業活動を進めていこうつもりです。



西の湖でのヨシ刈りボランティア風景

メンバーコーナー

★★組合員と共に環境に優しい取組みを行っています★★

コープしがでは、“子どもたちに安心して生活できる豊かな地球を渡したい”という想い、また滋賀県のCO2削減目標2030年50%削減(1990年対比)に向けてのチャレンジとして、二酸化炭素削減の取組み「1日エコライフ」を推進しています。

1日エコライフは、特定の日を「家族のエコライフデー」に決めて、その日の二酸化炭素削減量を計算するものです。

- ① 部屋を出るときは明かりを消した。 27g
- ② テレビのつけっぱなしをやめ見ないときは消した。 50g
- ③ エアコンの設定温度は28℃以上にした。 122g
- ④ レジ袋はもらわなかった。 42g
- ⑤ 電気ポットでの保温をやめ、使うたびに沸かした。 133g
- ⑥ 冷蔵庫の扉の開け閉めを少なくした。 13g
- ⑦ シャワーのお湯は出しっぱなしにせず、こまめに止めた。 86g
- ⑧ 洗剤やシャンプーを使いすぎず適量使った。 48g
- ⑨ 温水洗浄便座のふたは閉めた。 43g
- ⑩ 車を使わず、徒歩・自転車で移動した。 400g

(1日で減らせるCO2の量)

1日エコライフは、2008年度18,584人、2009年度18,566人が参加する取組となっています。発生するCO2の3割程度は家庭から排出されているのが現状です。

このような小さな取組みではありますが地道に呼びかけを行っていきたくと考えています。

※※ ネットワークメンバーの皆様も是非チャレンジしてくださいね。

★★2/21西の湖ヨシ刈りボランティアに参加して★★

「ヨシを刈ることで何か環境に良いことをしたという満足感を味わえました。」

「自然の中で過ごす時間が一番贅沢ですね。」

「びわ湖の環境を守るという一つの目標に向かってネットワークメンバーが
集まるっていいですね」

というご意見を参加した組合員、職員から頂き、自分自身も大変嬉しく感じています。来年のヨシ刈りも是非、楽しく参加したいと思います。

“本当にいいですね。ヨシでびわ湖を守るネットワーク”

ヨシ刈りを中心に無理のない取組、無理のない繋がりを大切にしているところ... などなど。このネットワークがさらに広がり、美しいびわ湖の自然を未来に残せるよう頑張りましょう。

編集後記

ヨシ原は今まさに新しい新芽が芽吹き、緑のじゅうたんを敷きつめた風景に様変わりしています。耳を澄ませば鳥たちのさえずりが聞こえ、自然の恵みをあらためて感じます。みなさんも時間を見つけてヨシ原を訪れてみてはいかがでしょうか。きっと小さな感動を覚えるはずですよ。

イヌワシのお話、興味津々なことばかりでした。滋賀県にイヌワシのような大型の鳥が棲んでいることは驚きです。「山にイヌワシが棲み続けられる豊かな森になることがびわ湖の環境を守っていく」自然は繋がっていることを改めて知らされました。山崎様、取材有り難うございました。また、コープしがの北村様、来シーズンのヨシ刈り期待しています。

ネットワークで刈り取ったヨシをリエデン製品の原料の一部として使用しています。自分たちが刈り取ったヨシを自分たちの使う紙にすることで、刈り取る～作る～使うの循環が出来ることとなります。わずかな量ですが大きな一歩だと思っています。

お知らせ



生活協同組合コープしが 北村様より



ぱくぱく君とヨシ刈り

REEDEN

びわ湖を知る ■ 解答

③ 1993年(平成5年)北海道釧路市で開催された「ラムサール条約第5回締約国会議」で湿地登録の交付を受けました。